東南アジア研究　第6巻 第2号　1968年9月

リス語比較研究(続)

西田龍雄

A comparative study of the Lisu language (Tak dialect) II

by

Tatsuo NISHIDA

まえがき

前稿「リス語比較研究」[1] において，アカ (Akha) 語，ビス (Bisu) 語およびビルマ語を比較して，リス (Lisu) 語の形式が異源語であると考えられる形態素のうち，まず借用語をとり上げ，つづいて同源形式を対象に，初頭音素の対応通則をいくつか設定した。本稿は，その続編として，リス語の母音音素の来源を追求するとともに，いわゆる異源語の中の若干の形式について，その系統をさぐることを目標にしている。

リス語がビルマ語およびアカ語，ビス語，ラフ語と同じ系統の言葉であることは，前稿においても，すでに十分に論証されて疑うことができないと思う。したがって，細かい対応通則を追求する目的は，リス語の形式がはたしてほかの言葉のどの形式と対応するかということと，ほかの言葉の対応形式からリス語の歴史を推測できること，そして，さらにその対応の仕方から，リス語がこの一群の言葉の中で，どのような位置を占めるべきであるかを決定することにある。もちろん，一つの言葉を特定の言語グループ内に位置づける仕事は，同源形式の分布度合と音素対応の性格のみにもとづくことは危険であるけれども，この二つの要件が，その決定に有力な根拠を提供することは事実である。

本稿においても，同源形式の発見と音素対応通則の設定を通じて，リス語とその親近語，ビス語，アカ語，ビルマ語，そしてラフ (Lahu) 語との関係を解明する。その手続として，前稿においてたてた通則 (Rules 18-57) を基準に，リス語を対象とした新しい通則を設定していきたい。たとえさきに設けた通則がリス語に関しては役割を果たさなくても，それらが排除または改変されたことにはならない。

1) 『東南アジア研究』第6巻第1号(1968)，pp. 2～35.

I　母音音素の対応通則

ビス語，アカ語，中古ビルマ語の母音音素 (-V) および母音と末尾子音の連続形式 (-VC) の目録は，「ビス語の系統(続)」において提出した。ここではリス語およびラフ・シ (Lahu Shi) 語，ラフ・ナ (Lahu Na) 語の目録を掲げたい。[2]

この3言語の単純母音音素は，つぎの体系をもっている。

Lisu	i — e — æ — y — œ — ɯ — ɤ — a — u — o	10母音システム
Lahu Shi	i — e — ɛ — ɤ — a — u — o —— ɔ	8母音システム
Lahu Na	i — e — ɯ — a — u —— o	6母音システム

母音体系の類型からいうと，リス語は 4＋4＋2 システム，ラフ・シ語は 2＋3＋3 システム，ラフ・ナ語は 3＋2＋1 システムに属させることができる。

Lisu	Lahu Shi	Lahu Na
i y ɯ u	i u	i ɯ u
e œ ɤ o	e ɤ o	e o
æ a	ɛ a ɔ	a

リス語の体系は，前舌および後舌の位置で狭母音と半狭母音に張唇と円唇の対立 (i : y, e : œ, ɯ : u, ɤ : o) があることによって特徴づけられ，ラフ・シ語の体系は，前舌および後舌の位置で半狭母音と半広母音の対立 (e : ɛ, o : ɔ) があることによって，ラフ・ナ語の体系は，ラフ・シ語に見られるような対立がないことによって，それぞれ特徴づけられる。この三つの言語の体系は，相互に一致しないし，さきに述べたビス語・アカ語・ビルマ語の体系にも，これらの3言語は異なっている。[3] ビルマ・ロロ語系に属するこれらの言語は，同じ一つの共通体から来源し，各々の言葉で独自の基本母音体系を形成したことになる。

リス語にもラフ語にも，特定の子音と連続する -VC 形式は認められない。この点この3言語は，ビス語やビルマ語と類型的に大いに異なっている。鼻音化母音はあるが，つぎの数形式に限られ，ほとんどが借用語のみにあらわれる。[4]

2) リス語の体系は，拙稿「リス語の研究」『東南アジア研究』第5巻第2号(1967)によっている。ラフ・シ語は，Chiang Rai 県 Maechan にて，筆者が調査した資料にもとづき，ラフ・ナ語は Tak 県 Doi Mussuh で調査した資料による。拙文「タイ国北部の言語調査について」『東南アジア研究』第3巻第3号(1965)を参照されたい。なお Tak 県のラフ・ナ語は Chiengdao のラフ・ナ語とはかなり違っているようである。後者には Matisoff 氏の dissertation, *A grammar of the Lahu language* がある（未見)。

3) 拙稿「ビス語の系統(続)」『東南アジア研究』第4巻第5号(1967)，pp. 55～56.

4) リス語については，上掲「リス語の研究」p. 63を見られたい。

Lisu	an	on	un	in	ian	uan
Lahu Shi	an	on	ɔn	en		
Lahu Na	an	on		en		

母音結合も，つぎの数種の形式に限られ，しかも鼻音化母音と同様に，ほとんどが借用語に認められる。

Lisu	ua	ia	ae	ue
Lahu Shi	ae	oe	ɔe	
Lahu Na	ae	oe		

これらの母音結合および鼻音化母音は，以下の比較研究にあたって，まったく役割を果たさない。したがって，共通形式の -V および -VC 形式が共に -V 形式に統合されていく方向が，リス語の歴史においても，ラフ語の歴史においても，有力な変化趨勢であった。ただその統合の仕方が，それぞれの言葉で違ったために，特有のシステムが作り出される結果になったのである。言語の比較研究は，そのような変化趨勢をもあとづけることになるであろう。

以下，ビス語，アカ語，ビルマ語の -V および -VC 形式がリス語，ラフ語の -V 形式といかに対応するかを考察し，その対応通則を設定した。[5] 前稿「ビス語の系統(続)」と照合するならば，ビス語，アカ語，リス語，ラフ・シ語，ラフ・ナ語，ビルマ語の基本的な対応関係が明らかになる。前稿で掲げた例が別の形態素に入れ替わっているのは，それにあたる同源形式が，リス語に発見できない場合である。

Rule 18 Bisu -a : Akha -a : Bur. -a には，Lisu -ah (Lahu Shi -a, Lahu Na -a) が対応する。

	Lisu	Shi	Na	
"moon"	hah-bah	hàh-páh	hàh páh	*-hla
"to hear"	beh dzàh-ʔah	káh-ve	kà káh-lɯ	*gra
"tongue"	lah-tšhœ	hàh-líh	háh-líh	*-hlya
"to eat"	dzàh-ʔah	tsáh-ve	tsàh-lɯ	*dza-

そのほか，すでに掲げた同源形式のうち，この Rule が適用される形態素として，つぎの例がある。

"right hand" lǽ ja : *lak, kya "between" -tshâh : *a kra^2, "to come" lah-ʔah : *la, "to be thin" bàh-ʔah : *ba-, "child" zàh: *sa^2, "frog" uó páh : *ba^2, "pain" nah : *na-, "to stop" nah-ɣɯh : * na-, "tiger" làh-ma : *kla^2, "knife" ʔa-thàh : *da^2.

5) ここでは，リス語の比較研究が主目的であるために，ラフ語の対応形式の検討には深くたち入らなかった。ラフ語については，別稿「ラフ語比較文法」において論じたい。

このもっとも確実な Rule 18 に少数の例外となる形がビス語にあった。ビス語では,"salt" "fish" "to be enough" は -a 母音をとらず, ɔ 母音を対応形式とした。筆者は, この現象を Rule 18 とは別に, Rule 19 としてとらえ, これは, ビス語がかなりのちの stageで起こしたごく一部の形式変化であると推定した。リス語でもラフ語でも, Rule 18 と 19 の弁別は意味をもたないから, やはり Rule 19 はビス語を特徴づける事実であるといえる。

	Bisu		Akha	Bur.		Lisu	Lahu (Shi, Na)
"salt"	tsɔ̀-mɛ̀	:	sà dɤ	tsha²	:	tshàh-bo	×
"fish"	ʔaŋ-ŋɔ̀	:	ŋà-šà	ŋa²	:	ŋuá	ŋá

"to be enough" は Lisu lŏh-ʔah, Lahu Shi pê-lù, Lahu Na lăe-lù のごとく, いずれも Bur. lɔk-se に対応する異源語形式が用いられている。ラフ (Shi, Na) 語の "salt" は a-lê であり, これも上掲例とは異源語形式である。

一方, リス語には, Rule 18 (19) の基本対応形 -ah のほかに, 上例 "fish" のように, -ua が対応する一連の形態素がある。

Rule 18b Bisu -a : Akha -a : Bur. -a : Lisu -ua : Lahu -a

	Lisu	Shi	Na	Bur.	
"I"	ŋua	ŋàh	ŋàh	ŋa	*ŋa
"to be bitter"	khua-ʔah	khàh-ve	kháh-ah	kha-²se	*kha-
"flesh"	jíh xùa	ɔ̀-sàh	ô-sàh	a-sa²	*sa
"to seek"	xuá-ʔah	tsáh-ve	tsáh-lɯ	hra-se	*hra-
"to borrow"	ŋuá-ʔah	ŋàh-ve	×	hŋa²-se	*hŋa²-

この対応関係からみると, ラフ (Shi, Na) 語は, Rule 18 と同じく -a 母音を対応させるのに, リス語は, 初頭音が軟口蓋音 (k-), kh-, ŋ-, x- である場合に, 基本形式 -ah をすべて -ua に変えるというリス語特有の Rule がはたらいたことになる。この Rule は Rule 18 と補う性格をもつために, Rule 18 b とする。

共通形式 -ya および *-la には, リス語は, それぞれ -iah および -je をあてる。

		Lisu	Shi	Na	Bur.	
i)	"bee"	biàh	à pɛ́h	pèh	bya²	*bya²
	"many"	ʔa-miah	máh-ve	pɛ́h-a	mya²-	*mya²-
	"hundred"	tì-ĥiah	tè-hàh	(tí lói)	ta-rya	*rya-[6]
ii)	"to fall"	kje-ʔah	tsé-ve	tsi-lɯ	kya³-	*gla-
	"to drop"	khje-ʔah	tshé-ve	tshi-lɯ	khya³-	*khla-

6) リス語 ĥia は, 中古ビルマ語形 rya によく対応する。ビルマ語では "hundred" rya>ra>ya の変化があった。(cf. Tib. brgya) なおラフ・ナ語 ti lói はタイ語からの借用形式である。

前者 -ya には，リス語は Rule 18 をそのまま適用し，後者 -la には，リス語では別の Rule 18c がはたらいた。

Rule 18c Bisu, Akha -la : Bur. -ya : Lisu -je : Lahu Shi - e : Lahu Na -i

ラフ語は，シ方言ナ方言ともに別の対応通則が必要となるが，ここでは述べない。

この *-ya および *-la の対応関係はつぎの表のごとく整理できて，リス語はビス語・アカ語とラフ語のちょうど中間の位置にあることがわかる。

		Bisu Akha	Bur.	Lisu	Shi	Na
i)	*-ya	-ia	-ya	-iah	-e -a	-e
ii)	*-la	-la	-ya	-e	-e	-i

Rule 20 Bisu -a : Akha -a : Bur. -ak に対して，リス語は，i) -æ, ii) -a (-ia), iii) -e の3種の対応形式をもっている。

		Lisu	Shi	Na	Bur.	
i)	"hand"	lǽ phǎ̈h	lâ kɔ́h	lâ kóh	lak	*lak
	"leaf"	sŭ̈h phǽ	ɔ̂ phá	sû phá	phak	*phak
	"pig"	ʔah-vǽ	vâ	vâ	wak	*vak
	"bird"	ňǽ	ŋǎ	ŋǎ	hŋak	*hŋak
	"rat"	ʔah-hǽ	fǎ tshà	fǎ tshà	krwak	*krwak
	"dream"	jǐh mǽ	zɤ̂ mǎ	zû mǎ	ʔip mak	*mak
ii)	"hen"	ʔah-jáh-ma	ɣǎ-mà	ɣa-ma	krak-ma	*grak
	"to be ashamed"	sáh tòh-ʔah	zǎ tɔ̀-ve	?	hrak-se	*hrak
	"branch"	sŭ̈h lǽh káh	ɔ̂ kǎ	sû kǎ	a-khak	*a-khak
	"to join"	tsháh-ɣɯh	(tshɤ̂-ve)	tsa dà-lɯ	tšhak-se	*tšhak-
	"eye"	miah-sù̈h	mĚ sìh	mě sìh	myak tši	*myak-tši

このほか，つぎの形態素にも同じ Rule が適用される。

			Lisu		Bur
"navel"	*khyak	:	khjǎh-dùh	:	khyak
"to cook"	*khyak-	:	šah-ʔah	:	khyak-se
"banana"	*hŋak-	:	ŋa-ma-sù	:	hŋak prɔ

リス語における i) ii) の分裂は，何に起因するのか明瞭ではないが，あるいは共通形式の相違，すなわち i) は -ak, ii) は -yak, -rak の反映であるとも考えられる。その推測が当を得ているならば "rat" の共通形式は *hwak, "branch" の共通形は *krak であったことにな

る。

ラフ語は，i) には -a があたり，ii) にも -a が対応するほかに一例 "eye" の -e 母音がある。前稿にあげたビス語の例外的な対応形 "eye" mè-hnɯ もこれと通じる変化現象である。

		Bur.	Akha	Bisu	Lisu	Lahu (Shi, Na)
i)	*-ak	-ak	-a	-a	-æ	-a
ii)	*-yak	-yak	-ja	-a	-a	-a
	*-rak	-rak		-ɛ (eye)	-ia (eye)	-E -e (eye)

		Lisu	Shi	Na	Bur.
iii)	"black"	jǐh ne neh	nǎ-ve	nǎ-e-ve	nak
	"to crack open"	ʔe-ʔah	?	?	ʔak-se

この2形式が，まったく例外的な対応を示している理由は明らかではないけれども，おそらく nǽ>ne および ʔæ->ʔe- の変化をうけたのであろう。(cf. p. 34,40)

Rule 21 Bisu -aŋ : Akha -o : Bur. -aŋ および Rule 24 Bisu -ɔŋ : Akha -on : Bur. -ʷoŋ->waŋ には，Lisu i) -oh および ii) -uh が対応する。(lahu -ɔo)

		Lisu	Shi	Na	Bur.
i)	"to see"	moh-ʔah	mɔ̂-ve	mò-ve	mraŋ-se
	"old man"	tsheh-mòh	tshɔ̀h-mɔ́h	tsóh-móh	ʔɯ-maŋ²
	"deaf"	náh-bòh	(-bàh-ve)	-pòh-ve	na² paŋ²
	"to drink"	do-ʔah	dɔ̂-ve	dô-lɯ	*daŋ-
	"person"	làh-tshóh	tshɔ̀h	tshòh	*tshaŋ

このほか

"to be light (not heavy)"	Lisu lòh-ʔah	:	Bisu laŋ²-se
"breast"	ʔoh-mɯh	:	raŋ-pat

があるが，"language" jǐh-ŋùh, "snake" fu, "river" jíh gya (=water) は，いずれもビス語，アカ語とは異源語形式である。

		Lisu	Shi	Na	Bur.
ii)	"to open"	phu-ʔah	phɔh-ve	phoh-lɯ	phwaŋ³-se
	"to wait for"	ĥuh ňæ-ʔah	lɔh-ve	loh-lɯ	tšhɯŋ² laŋ²-se
	"mosquito"	dzùh-pýh	tshâh kɔ̂	-kô mâ	khraŋ
	"you"	nuh	nɔ̂h	nôh	naŋ

この対応関係 i) ii) をみると，Rule 21 には -oh が Rule 24 には -uh が対応する大勢にある。しかし，ビス語とアカ語で Rule 21 が適用された "you" はリス語では nuh であり，Rule 24 に属する "breast" はリス語では ʔuh- とはならずに ʔoh- となる。したがって，この二つの Rules はリス語では厳密に弁別されていないことになる。

また，Rule 24 "to be high" と "horse" は，いずれもリス語で muh ではなく，mo となって，Rule 21 の "to see" と同じ母音をとっている。"to see" "to be high" "horse" の形式はつぎのような関係になる。

	Lisu	Bisu	Bur
"to see"	moh-ʔah	hmjáŋ-ŋɛ	mraŋ-se
"to be high"	mo-ʔah	ʔaŋ-hmɔŋ	mraŋ³-se<*mrʷoŋ
"horse"	ʔah-mòh	ʔaŋ-mɔŋ	mraŋ²<mrʷoŋ²

リス語 -o とビルマ語 -aŋ は3単語を通じて同形式であるのに対して，ビス語は "to see" のみを別形式とする。[7]

なお，ここで *-aŋ 共通形式と関連する対応関係を二つ追加したい。その一つは，さきに述べた -la>Lisu -je と並行して，つぎの2例では，共通形式 *-aŋ にリス語形 -je が対応する事実である。

	Lisu		Bur.		Bisu
"he"	jéh	:	*yaŋ	:	jaŋ
"to weigh"	khje-ňi-ʔah	:	khyaŋ³-se	:	tšaŋ-ŋɛ

いま一つは，さきに指摘した Rule 18 (対応形 -a) に対する Rule 18b (対応形-ua) と並行する現象が共通形式 *-aŋ に関しても認められる事実である。

"song"	Lisu	mòh guà	:	Bur. si-khyaŋ²
"sky"		mòh kua	:	mɯ² kɔŋ² kaŋ

これらは対応例が少なく，ことに後者は，軟口蓋初頭音のあとにあらわれる -oh, -uh の変

7) この三つの単語は，ロロ (Lolo) 語系の諸言語，ハニ (Hani) 語，ニ・ロロ (Nyilolo) 語，アヒ・ロロ (Ahilolo) 語，ノス (Nosu) 語では，ビス語と同じタイプを示している。

	"to see"	"to be high"	"horse"
Hani	mo 33	mu 33	mu 21
Nyi	ne 44 ŋo 33	m̩ 41	m̩ 55
Ahi	nie 44	mo 22	m̩ 44
Nosu	n̩i 33 ŋɔ 213		lu 33 mu 33

以下，ロロ語 (ニ，アヒ)，ハニ語およびノス語はつぎの文献を用いる。
馬学良『撒尼彝語研究』(中国科学院，1951)，袁家驊『阿細民歌及其語言』(中国科学院，1953)，高華年「揚武哈尼語初探」『中山大学学報』(1955)，高華年『彝語語法研究』(北京，1958)

形であるかどうかも明瞭ではないが，いちおう 21，24 の subrules としてあげておきたい。

Rule 22　Bisu -ɔ : Akha -o : Bur. -wa<-^{w}o には Lisu -ɯh, -ah が対応する。

	Lisu	Bisu	Bur.
"door	ʔah-khùh	láŋ kɔ	tam kha^{2}<*kh^{w}a
"tooth"	sùh-tshɯ	sɔ̀ phjè	s^{w}o^{2}>swa^{2}
"rain"	mù-ɦah	mèŋ hɔ̀	mɯ-r^{w}o>rwa

"rain" のリス語形には，上掲 Rule 18 が適用されており，"door" と "tooth" の例からみると，リス語の対応形式は -ɯh になる。前稿であげたいま一つの例 "to walk" ビス語 jɔ̀-ŋɛ とそれに該当するリス語形 šœ̀h-je-ʔah は，同源の形式ではない。[8]

Rule 22 と並行する Rule 23 Bisu-ɔ : Akha-o : Bur.-^{w}ok>-wak には，Lisu -o が対応する。

	Lisu	Bisu	Akha	Bur.
"grass"	mò	mɔ̀-kà	za-mò	mrak<mr^{w}ak
"ant"	bòh-loh	×	ʔa-ho	pa-rwak<*r^{w}ok
"to go out"	doh lah-ʔah	×	ʔí-do-ɦɯ	thwak-se<*th^{w}ok

これにあたるラフ語の対応形は，-ɤ -i -ɔ となって規則的ではない。[9] なお，前稿であげた "rat" はリス語では Rule 20 が適用される。

以上の結果，Rule 18 から24までについて，ビス語とリス語の関係をまとめると，つぎのようになる。

		Bisu	Lisu
18	*-a	-a	-ah
20	*-ak	-a	{ -æ -a
21	*-aŋ	-aŋ	{ -oh (-uh)
22	*-^{w}ɔ	-ɔ	-ɯh
23	*-^{w}ok	-ɔ	-oh

8) šœ̀h (-je)-ʔah は Bur. khriy hlam^{2} "to step" のあとの形態素に対応する。ビルマ語 hlam^{2} "to step" は lam^{2} "path" の動詞形である。なお khriy は "foot" の意。(cf. Rule 44. p. 34)

9)

	"grass"	"ant"	"to go out"
Lạhu Shi	mɤ́	pì ɣɔ̌	tɔ̌-e-ve
Lahu Na	m̀	pù ɣǒ	tǒ-i-lɯ

24	*-ʷoŋ	-ɔŋ	{ -uh (-oh)

Bisu : Akha : Bur. の間で考えられる Rule 25 から Rule 31 までの対応通則は，前稿で検討した結果，つぎのような関係になった。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
Bur.	*-ætš>-atš	-ay	-uy	-iy	-i
Bisu	-ɯ	-ɯ	-ɯ -i	-ɯ -i	-i
Akha	-ɯ	-ɯ	-ɯ -i	-ɯ -i	-i

これらに対してリス語はつぎのように対応する。

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	*-ætš	*-ay	*-uy₁ *-uy₂	*-iy₁ *-iy₂	*-i
Lisu	-i -ɯ	-u	-ɯ	-ɯ -i	-ɯ

リス語では，-i 母音と -ɯ 母音は，親近言語との対応関係からみると，初子音の性格で補い合う関係になっているから，実際には，(2) には -u, そのほか (1) (3) (4) (5) には，すべて -ɯ が，対応するとみなして差し支えがない。[10]

Rule 25 Bisu -ɯ : Akha -ɯ : Bur. -ætš>-atš : Lisu -i, -ɯ (Lahu Shi -ɤ, -i : Na -ɯ, -i)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to be new"	jǐh ši	ɔ̂-sɤ̌	ô-sɯ̌	satš-se
"wrist"	lǎ tsɯ	la kɔ tsɤ̌	la-tsɯ̌	tšhatš
"heart"	ňih-ma	nih-ma sǐ	ňi-mà sǐ	hnatš
"tree"	sɯ̌h dzɯ̀	sɤ̌ tsɛ̂	sɯ̂ tsê	satš-paŋ
"one"	tíh～thèh	téi mâ	ti ma	tatš

リス語の -i は š- ň- t- のあとに，-ɯ は s-, ts- のあとにあらわれて相補関係をなしている。ラフ・シ語は -ɤ と -i が，ラフ・ナ語は -ɯ と -i が同じ関係にある。

Rule 26. Bisu -ɯ : Akha -ɯ : Bur. -ay : Lisu -u (Shi -i : Na -u, -ɯ)

	Lisu	Shi	Na
"to buy"	wu-ʔah	vîh-ve	vûh-lɯ

10) -i -ɯ の補い合いは，記述的に認められる母音の対立が歴史的に扱われた場合に，同一認定され得る例である。リス語のような allophone の多い言葉では，当然問題になる。(cf. p. 37)

"star"	ku-zà	mɤ̌h kìh	mɯ́h-kɯ́h
"to laugh"	nà šœh-ʔah	ɣîh-ve	ɣɯ̂h-lɯ

リス語の "to laugh" は *ù-ʔah šœh-ʔah から来源しているのであろうか，他の2例との並行関係を重視すると，-u が主核母音であると考えられる。

Rule 27　Bisu -ɯ : Akha -ɯ : Bur. -uy : Lisu -ɯ (Shi -i, -ɤ : Na -ɯ)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"dog"	khɯ̀h	phíh	phɯ̀h	khuy²
"gold"	dzɯ̀h			hruy
"feather"	ňæ̌ mɯ̀	ŋǎ mɤ̌h	ŋǎ mɯ̀h	muy²
"to choose"	sɯh-ʔah	(lè-ve	lɯ́ lɯ-ve)	ruy²-se

Rule 28　Bisu -ɯ : Akha -ɯ : Bur. -iy : Lisu -ɯ (Shi -i, -ɤ : Na -i, -ɯ)

"foot"	tshɯ̀h phæ̌h	khíh	khɯ́h	khriy₂
"urine"	zɯ̀h thy	zɤ̌h ɣîh	zɯ̀h pǐh	siy²
"wine"	dzɯh phɤ̌h	zɤ̂h	zɯ̂h	siy
"medicine"	næh tsɯ̀	ná tshɤ̌h	ná tshɯ̀h	tšhiy²
"to be far"	ɣɯ̀h-ʔah	víh-ve	vɯ̀h-e-ve	wiy²-se
"day"	ňih	ɔ̂ nih	ňih	niy
"earth"	mih-tshah	mîh gîh	mih ɣɯ̂h	mriy

そのほか "to untie" Lisu phɯ́h-ɣɯh : Bur. phriy, "seed" jǐh sɯ̀ : a-tšiy³, "to lend" tšhìh-ʔah : khiy²-se, "to be heavy" lìh-ʔah : liy²-se, "boat" tšuh-lǐh : hliy の諸例があり，この -ɯ, -i も相補関係にたっている。

Rule 29　Bisu -i : Akha -i : Bur. -uy : Lisu -i (Shi -ɤ, -i : Na -ɯ)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"blood"	jǐh-ši	ɔ̂-sɤ̌h	ô-sɯ̀h	suy
"sweat"	tšíh-jeh	ɔ̂-ɣîh	kɯ̀h	khyuy²
"beard"	mìh-tsɯ	ɔ̂-mɤ̌h	(pà-tsɯ́)	hmuy²
"to spit"	tìh-ʔah			tuy²-se

このリス語 -i に対する -ɯ の存在も予想できるが，実例は見出し得ない。

Rule 30　Bisu -i : Akha -i : Bur. -iy : Lisu -i, -ɯ (Shi -ɤ, -i : Na -ɯ, -i)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to die"	ših-u	sɤh-ve	sɯh-lɯ	siy
"to give"	gɯ̀h-ʔah	píh-ve	pìh-a	piy²-se

"grandmother" Bisu ʔa-phì : Akha ʔa-phì には，Lahu (Shi, Na) a-pí が対応するが，リス語 áh-zàh は，それらとは異源語形式である。なお Lisu gɯ̀h- "to give" の初頭音については，上掲 Rule 27 の "dog" および「リス語比較研究 I」の p. 22, 24 の注を参照。[11]

Rule 31 Bisu -i : Akha -i : Bur. -i : Lisu -ɯ (Shi, Na -e, -i)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"animal's tail"	jǐh mɯ́h	ɔ̀ mèh	ô mèh tu	a-mri²
"fruit"	sɯ́ sɯ̀h	ɔ̀ síh	ǐ-sìh	a-si²
"to ride"	dzɯ̀	tšíh-ve	×	tši²-se
"to know"	sɯ́h-ʔah	sì-ve	si-a	si³-se

そのほか，"younger brother" ňih-zà : Bur. ňi (Shi á- nă, Na ňi-pae), "to beat" ti-ʔah : Bur. ti³-se (Shi dɔ̌-ve, Na dǒ-lɯ) の例がある。

"fire" mi² にはリス語は，異源語形式 ah-tóh (Shi a-mì, Na a-mì) が対応する。

この諸系列は，上述のごとく，リス語では共通形式 *-ætš, *-uy, *-uy₂, *-iy, *-iy₂, *-i がすべて合一して一つの形式 -ɯ (or -i) にまとまり，それが -*ay 形式と対立している。それゆえ，共通形式が -uy であったか -uy₂ であったかあるいは -iy か -iy₂ かは，リス語とビルマ語の間だけではわからない。たとえば

	Lisu	Shi	Na	Bisu	Bur.
"to be near"	nɤ̌h-ʔah	×	ňìh-a	ʔaŋ-dɯ̀	ni²-se

の共通形式が niy₂ であることは，ビス語形の存在によってはじめてわかる。また，

	Lisu	Shi	Na	Bisu	Bur.
"to be big"	ʔùh-ʔah	ʔìh ve	ʔɯ́h-a	ʔaŋ-hɯ̀	kri²-se

の共通形式としてビス語形とアカ語形 (ʔa-hɯ̀) から *hiy₂² < kriy₂² を推定したが，リス語およびラフ語の対応形から考察すると，"to be big" の Bisu-Akha-Lisu-Lahu 共通形式は *ray < *kray になって，ビルマ語形の kri² とは別の（異語幹）形式であることが明らかになる。

11) "to give" Bur., Maru, Lashi, Lahu, Akha, Bisu は一致して共通形 bi- に対応する形式をもつが，リス語のみが gɯ̀h-ʔah 形式をとる。(cf. Tib sbyi-n-pa) b- : Lisu g- の対応は，あるいは "to be far" 共通形式 viy : Lisu ɣɯ̀h-ʔah の v- : Lisu ɣ- と並行する現象であるかもわからない。

Rule 32　Bisu -ɛ, -ɛŋ: Akha -i : Bur. -ʔ (-iyʔ) にはリス語のつぎの形式が対応する。

	Bisu	Akha	Lisu
"to go"	ʔɛ́-ŋɛ	ʔí-ɦɯ	gi-ʔah
"outside"	ʔaŋ-hŋɛ́	la-ňí	nǐh suh mua
"cat"	ʔa-mɛ̀ŋ	ʔa-mí	ah nǎ̈ tsɯ
"to go$_2$"	lɛ́-ŋɛ	lí-ɦɯ	je-ʔah
"root"	ʔaŋ-khjɛ̀-	dù-kí	sǔ̈h kìh[12]

リス語の対応形式は明瞭ではないが，-ih が基本形であると考えて誤りはない。"cat" "to go$_2$" はおそらく同源語ではないであろう。なおラフ語の対応形もはっきりしないが，基本形は -i であると考えられる。

"cat"　Shi　nà mǐ khɔe,　Na　mǐ-nè

"root"　Shi　ɔ̂ tšʰǐh,　Na　sû χɯ

Rule 33　Bisu -ɤ : Akha -ɤ : Bur. ? : Lisu -o, -ɤ (Lahu -ɔ)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to pull"	χòh tǎ̈h-ʔah	gɔ̂-ve	χòh-lɯ :	run^2-se
"to shoot"	bɤ-ʔah	bɔ̌-ve	bǒ-lɯ :	×

ラフ語は共に -ɔ があたるが，リス語は -ɔ, -ɤ に分かれる。前稿であげた残りの2例 "to hate" Lisu ňih dzu-ʔah は異源語形式であり，"to be far" は，Rule 28 に属させるべき形式であった。

Rule 34　Bisu -ɤŋ : Akha -ɤ: Bur. ? : Lisu -ɯ (?)

	Lisu	Shi	Na	Akha
"pillar"	dzɯ khu	ɔ̂-tsìh	(χê khɯ́)	xò zɤ̌

Lisu 語 "town" páh-tsù, "to arrive" péh-ʔah はいずれもビス語アカ語とは異源形式であって，この Rule のリス語の対応形は明瞭ではない。ラフ語の対応形式も同様にはっきりしていない。反面，この Rule 32. 33. 34 は，ビス語とアカ語の間で確実な対応関係をもち，両言語における語彙分布の並行性を示すとともに，より強い親近関係を証明する対応通則であると言える。

筆者は，「ビス語の系統(続)」において，ビルマ語 -aň<-æň に，アカ語は規則的に -on 形

12)　「ビス語の系統(続)」p. 61 で Bisu ʔɛŋ : Akha khì (Bur. khiy^2) を対応させたが，この二つは異源語形式であると考えたほうが妥当かもしれない。(cf. Lisu khjì, Lahu Shi ɔ̂khɛ́, Lahu Na khê)

式一つを対応させるのに対して，ビス語は，三つの形式 -iŋ, -eŋ, -ɯŋ に分裂して対応するところから，三つの通則 35, 36, 37 をたてた。そして，チベット語の対応形を参考にして，35には共通形式 *-æň を，36には *-æŋ を，37には *-æn をそれぞれ設定して，ビス語の対応形式の相違を説明しようとした。35, 36, 37 にあげた対応関係をリス語（およびラフ語）にまで拡張するとつぎのようになる。

Rule 35 Bisu -iŋ : Akha -on : Bur. -aň : Lisu -ih (Shi -e -i, Na -e -ɯ)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to be ripe"	mi-ʔah	me-ve	me-uh	hmaň³-se
"nail"	lǽ šìh	lâ sìh kǔ	lâ sɯ̀h kú	lak saň
"pus"	bih khɯ́h	×	béh ɣɯ̀h	praň

リス語"liver"は漢語からの借用語の形式に入れ替わった。(cf.「リス語比較研究 I」p. 13)

Rule 36 Bisu -eŋ : Akha -on : Bur. -aň : Lisu -y

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"name"	jíh-mỳ	ɔ̀-mè	ô mè	a-maň
"to be sour"	kjỳ-ʔah	tseh-ve	tši-ʔah	khyaň-se

Rule 37 Bisu -ɯŋ : Akha -on : Bur. -aň : Lisu -ɯh, -ih

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"thread"	tshɯh-zà	ɣû khèh	ɣû khèh	khraň
"to be full"	bíh-ʔah	bih-ve	bih-lɯ	praň³-se

これらの対応例は多くはないが，幸いリス語の対応形式は規則的ではっきりとしている。ここでも -ih, -ɯh が補い合う関係にあるとすると，共通形式 *-æň *-æn は上述の -ætš と同じ変化をたどり，*-æŋ のみがそれらと異なった形式をもったことになる。ラフ語にどのような分裂条件がはたらいたのかわからないが，対応形式は統一的ではない。

	Bisu	Lisu	Shi	Na	Akha
35 *-æň	-iŋ	-i	-e, -i	-e, -ɯ	-on
36 *-æŋ	-eŋ	-y	-e	-e, -i	-on
37 *-æn	-ɯŋ	{ -ɯh -ih	-e -i	-e -i }	-on

Rule 38　Bisu -ɛ : Akha -e : Bur. -at, -ʷat : Lisu -ɯ, -i

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to be hungry"	mù-ʔah	mê-ve	mù-lɯ	mʷat-se
"to kill"	sih-ʔah	×	×	sat-se
"to take off"	lú-ʔah	×	×	khlʷat-se
"to lick"	lɯ-ʔah	lê-ve	lê-lɯ	mlʷat-se

これらの例ではラフ語の対応形式は不明瞭ではあるが，リス語では -ɯ または -ih が対応する。この2形式も上述のごとく，果たして補い合う関係にあるとできるか否かは必ずしも明らかではないけれども，このうち -ih をとる "to kill" (Bur. -at に対応) は，つぎに掲げる諸例と一類をなしていると考えられる。

	Lisu	Shi	Na	Bur.
i) "to vomit"	phè-ʔah	phêh-ve	phî-ve	phat
"ogre"	nèh	né	nî	nat
"deer"	khjeh	tšhěh	×	tšhat
ii) "to stand up"	ĥìh la-ʔah	hǔ-ve	hu-há	rap
"sandal"	tshɯh ňi	khíh nǔ	khúh nu	phi-nap

したがって Rule 38 は，実際には三つに分けて，

	Bisu	Akha	Lisu	Shi	Na	Bur.
Rule 38a	-ɛ	-e	-ɯ	?	?	-ʷat
38b	-ɛ	-e	-e	-e	-i	-at
38c	?	?	-i	-u	-u	-ap

とすべきであろう。

このほか，つぎの例に，Akha -e : Lisu -e の規則的な対応関係が認められる。

	Lisu		Akha
"to catch"	ne-ʔah	:	ňe-ɦɯ
"to shake"	ɣǒh ňe-ʔah	:	ɣǒ-ňe-ɦɯ
"rice-field"	de-mi	:	de-i-já
"flower"	sǔh-vè	:	a-bo-je
"to kick"	pěh	:	be-ɦɯ

Rule 48-49 Bisu -aw, -uŋ : Akha -œ : Bur. -ɯ の変形として認めた Rule 39 は，リス語では，3例のうち "chain" leh-tsù が漢語からの借用語であり (鏈子 liàn-zi), "corner"

jíh-lǽ は異源語形式であるほか，“thunderbolt” mùh gùh には，規則形式 -uh が対応する。それゆえ，この変形通則 Rule 39 は，リス語には成立しないことになる (cf. Rule 48)。

Rule 40 Bisu -u : Akha -u : Bur. -u : Lisu -u (Lahu -u)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
“silver”	phuh	phuh	phuh	phlu
“to be thick”	thuh-ʔah	thùh-ve	thúh-a	thu-se
“to take”	zuh-ʔah	zûh-ve	vùh-lɯ	yu-se
“guts”	jíh-bu	ɔ̂-gû	ô-fu kù	ʔu
“egg”	ʔah ja fu	ɣǎ-ɣùh	ɣǎ-ʔu	ʔu³
“to be soft”	nùh-ʔah	núh-ve	nuh-a	nu³-se

リス語はこの規則形式 -u のほかに，つぎの例では，-y が対応する。

	Lisu	Shi	Na	Bur.
“to dig”	dỳh-ʔah	×	×	tu²-se
“to work”	mỳh-ʔah	×	×	mu-se
“head”	wú dỳ	×	a-tù-kù	×
“fry”	ly-ʔah	hu-ve	fu-lɯ	×

これらの単語に対応するラフ語の多くは異源形式であって (ex. “to dig” Shi kà-ve, Na ko-lɯ)，リス語の -u, -y 2形式が共通形式の相違を反映しているものかあるいは何らかの条件のもとに -u と -y に分裂したかは，今の段階では明らかにできない。

アカ語で -o が対応する “to look” と “to stir” には Rule 41 をたてたが，これに該当するリス語形式は見付からない。

“to look” Lisu tœ̌h-ňì-ʔah は，あとで述べるようにチベット語形に近く “to stir” は，Bur. hlup-se に対応する。したがって Rule 41 はリス語に関しては成立しない。

Rule 42 Bisu -u : Akha -u : Bur. -up : Lisu -ɯ, -i (Shi -ɤ̞, -i)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
“to suck”	tšhì-ʔah	tshɤ̞̂-ve	×	kyup-se
“to sew”	šìh-sɯ-ʔah	kî-ve	×	grup-se
“to cut”	khù-ʔah	tshɤ̞̀-ve	×	khut-se
“beard”	mì-tsɯ	ɔ̂-mɤ̞̀	×	mut tšhit hmuy²

“to sew” šìh-sɯ-ʔah は，漢語の織より借用された形ではないかと疑ったが，“to suck” な

どとの並行を重視すると，*grup に対応する形式とできるかもわからない。そのほか Lisu -œ が Bur. -up に対応する例が少数見出せる。

"to wrap"	Lisu thœ̌h-ʔah	:	Bur. thup-se	
"to sink"	lœh je-ʔah	:	hmrup-se<hmlup-se	

Rule 43　Bisu -am : Akha -m : Bur. -am : Lisu -o

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"iron"	ho	suh	suh	sam
"bear"	woh-phàh	ɣêh	ɣêh-pàh	wam
"floor"	dzòh-mah	kàh phíh	vah-phî h	kram²

Rule 44　Bisu -am : Akha -a : Bur. -am : Lisu -œ

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to smell"	nœh-ʔah	nûh-ve	nûh-lɯ	hnam²-se
"hair"	wúh tshœ̌h	tsš khèh	tsŭ khèh	tšham
"to fly"	vœh<bvœh	pûh-ve		pyam²-se
"to walk"	šœh je-ʔah			khriy hlam²-se
"bridge"	gòh dzœh	×	×	*dzam

Rule 43 と 44 は，アカ語の対応形が -m であるか -a であるかにしたがって分かれた。それと並行して，リス語は -o と -œ の対応形式をあてる。"to fly" はアカ語形がわからず，前稿では，Rule 43 に入れたが，リス語の対応形からみると，Rule 44 に属するものと考えられる。

Rule 45　Bisu -um : Akha -m : Bur. -um : Lisu -œ

	Lisu	Shi	Na	
"to clothe"	dœ̀h-ʔah	dèh-ve	déh-lɯ	dum-se
"to pile up"	dœh-ɣɯh	ô phuh	ô pùh	bum-se
"to pay money"	jœ̀h-ʔah	zɛ́h-ve	zèh-lɯ	zum²-
"mortar"	tshɯ́h khúh	tšhɛ́h-ma	tšhèh-ma	tshum

"mortar" のみが tshɯ́h となるのは，この形態素に tshœ́h>tshɯ́h の変化が起こったためであろう (cf. p. 40)。リス語の形式を不明瞭にしている一つの原因は，この種の個別的な変化にある。"to be warm" Lisu lœh-ʔah : Bur. lum-se の対応は確実であるが，これに対応するアカ語形は lón であり，lḿ とはならない。(Bisu 語形 ʔaŋ-lúm は規則対応形式)。

Rule 46　Bisu -um : Akha -m : Bur. -im : Lisu -ih

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"house"	ĥih	zɛ̂h	ɣêh	ʔim
"potato"	bìh	pɛh-sǐ	peh-sì	pin<*blim

リス語 "to be low" ʔe-ʔah は，漢語〝矮〟からの借用語と考えられ，"cloud" mùh kúh は，アカ語・ビルマ語形式 *dim とは同源語ではない。

Rule 47　Bisu -u : Akha -u : Bur. -ip : Lisu -ih

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to sleep"	jìh-tá	zɤ̂-ve	zû-i-lɯ	yip>ʔip

Rule 43 から Rule 47 までは，共通形式 *-am, -um, -im, -ip に関する通則であった。リス語は -am を，アカ語と並行して -o と -œ に分裂し，-um には -œ を，-im には -i を，-ip にも -i をそれぞれ対応させた。さらに Rule 38 *-ap に対する形 (-i) と，Rule 42 *-up の対応形 (-i) を加えると，ビルマ語，ビス語，アカ語，リス語，ラフ語の対応関係は，つぎの表のごとく整理できる。

	Bur.	Bisu	Akha	Lisu	Lahu	
*-am	-am	-am	-a	-œh	-u	Rule 44
			-m	-oh	-u	Rule 43
*-um	-um	-um	-m	-œh	-e	Rule 45
*-im	-im	-um	-m	-ih	-e	Rule 46
*-ap	-ap	-aw	-o	-i	-u	Rule 38
				-o		Rule 50
*-up	-up	-u	-u	-œ	?	Rule 42
				-i	-ɤ	
*-ip	-ip	-u	-u	-i	-ɤ	Rule 47

Bur. -ɯ に対応するビス語形式が -aw か -uŋ かによって，Rule 48 と 49 をたてた。この2形式の分裂は，共通形式の初頭音が鼻音であるか否かの条件にしたがっていた。リス語はその条件とは関係なく，Bur. -ɯ, Bisu -aw -uŋ, Akha -œ に，-uh, -oh, -ɯh, -ih の4形式を対応させている。

Rule 48-49a

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"to steal"	khùh-ʔah	khòh-ve	khòh-lɯ	khɯ²-
"nine"	kúh	kòh lɛ́	kòh-ma	kɯ²

"to cry"	ŋuh-ʔah	hɔ̂-ve	hôh-lɯ	ŋɯ-se
"smoke"	mùh khùh	mɤ̌h khɔ́h	m̀ khóh	mi² khɯ²
"inside"	jǐh khùh	ɔ̂ khɔ̀h	ô khóh vòh	×
"bone"	jíh ʔùh-tó	ɔ̂ ɣɤ̌h	ô mû kùh	ʔa-rɯ²

Rule 48-49b

"sheep"	ʔah-zoh	zɔ̂h	×	sɯ²
"sky"	mòh kuah	mɤ̌h nɔ̀h	m̀ nóh	mɯ²
"body"	ko-dɔ̀h	×	×	kɯ
"to thrust at"	thɔ̌h-ʔah	×	×	thɯ²-se

Rule 48-49c

"to be sweet"	tshih-ʔah	tshɤh-ve	×	khyɯ-se
"finger"	lǽ ňih	lâ nɤ̀h	lâ-nóh	lak-hňɯ
"to cough"	tsi-ʔah	tsɤ̌h-ve	tsù̀h-lɯ	khyɔŋ² tšhɯ²-se
"mushroom"	mih tšhìh	mɤ̂	m̀ pá	hmɯ³

Rule 48-49d

"to wash"	tshù̀h-ʔah	tshɤ̌h-ve	tshù́h-lɯ	khyɯ²-se
"horn"	jíh ʔúh tshɯ	ɔ̂-khɔ̌h	khóh	u²-khyɯ
"to melt"	dzù̀h duʔ-ah	×	×	kyɯ-se
"thunderbolt"	mìh dzù̀h	×	×	mɯ² krɯ²

ビルマ語形 -ɯ に対応する形式は，上述のビス語，アカ語のほかに，マル (Maru) 語の -ou，ラシ (Lashi) 語の -ao のように，かなり多くの同源形式をもっていて，規則的な対応関係を示すのが普通である。リス語は，この点についてもやや例外的な性格をもっていて，原初の段階では統一的に -uh であったのが，のちの段階で，一定の（ややあいまいな）条件の下に，その一部が -ih, -ɯh になり，別の一部が -oh に変わったものと考えられる。その変化はつぎのごとく推定できる。

earlier stage ⟶ later stage

khuh	>	khuh/khuh/	(after k- kh- ŋ- ʔ-)
zuh	>	zoh /zoh/	(after z- m- th-[kʔ])
tšhuh	>	tšhih /tshih/	(after tš- tšh- ň-)
tshuh	>	tshɯh /tshɯh/	(after ts- tsh- dz-)

tšh- と tsh- の対立は，記述的には母音 -ih, -ɯh の対立に還元して，同一音素と認めることができたが，比較言語の立場からは，tšh- と tsh- の子音対立が -ih, -ɯh 母音を性格づけることになる。リス語とやや近い性格を示しているのはロロ語である。

Nyi	Ahi	Bur.	
bẓ 11	bu	pɯ²	"insect"
kɯ 55	kɤ 44	kɯ²	"nine"
khɯ 11	khɤ 21	khɯ²-se	"to steal"
ŋ 44	ŋɤ 44	ŋɯ-se	"to cry"
m̩ 11	m̩ 11	mɯ²	"sky"
tʂhʐ 33	tʂhi 55	khyɯ-se	"to be sweet"

これらの例では b- のあとに u, k- kh- ŋ- m- のあとに -ɯ, tʂh- のあとに -i がそれぞれあらわれる。ラフ語の対応形式も，簡単な補い合い関係によって理解できる。

	Shi	Na
k- kh- h- のあと	ɔ	o
ts- tsh- ɣ-, Nasals のあと	ɤ	ɯ (m̩=mɯ)

Rule 50 Bisu -aw : Akha -o : Bur. -ap は，一例 "needle" がつぎの対応を示していて，Rule 38 の規則形 -i に対する例外形と認めなければならない。それに対して，ラフ語 -u は規則形式である。(cf. p. 32)

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"needle"	wò<ɣo	a-ɣu	ɣu	ʔap

アカ語に特有の母音 -ø は，それを含む多くの形式がビルマ語の -iy または -ay に対応するために，ある環境で生まれた -ɯ 母音の変形であるとみなした。その変形にはリス語 -i が対応する。

Rule 51 Bisu -ɯŋ(?) : Akha -ø : Bur. -iy, -ay : Lisu -i

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"four"	líh	ɔ̂-lɛ́	ô-ma	liy²
"to sit"	ňìh-táh	(mí-ve	mɯ-lɯ)	niy
"grandchild"	líh	ɔ̂-hɔ-è	×	mliy²>mre²

"to change" phǒh-ɣɯh は，アカ語 ʔ ø̀ pho-ɦɯ のあとの形態素に対応し，"bow" lo-pšh はアカ語 tša ʔø̀ とは異語幹形式である。しかし，この lo- はビルマ語 laŋ²-liy² の laŋ² に

対応する。

"bow" および "crossbow" のこれら諸言語における分布はつぎのようになる。

	Akha	Lisu	Shi	Na	Bur.
"bow"	×	lo-pšh	×	hôh-ma	laŋ²-
	tša-ʔǿ	×	×	×	-liy²
"crossbow"	kă	khjăh	khă	khă	du²-liy²

中古ビルマ語 -ɯ- 母音を含む音節には，-ɯk と -ɯŋ がある。ビス語は前者に -ɔ, 後者の対応形は不明，アカ語では前者に -o, 後者に -u が対応した。Rule 52, 53 に出した諸例 "to blow" "to bite" "to like" "stomach" のリス語形式は，いずれも Bisu, Akha, Bur. の -ɯk, -ɯŋ 形式とは異源語であって，この二つの Rules はリス語にはまったくはたらかない。

Rule 54　Bisu -ɔ, -ɔŋ : Akha -o : Bur. -ɔ : Lisu -oh, -uh

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"waist"	dzòh-lɤh	tsɤ̂h pê	×	kyɔ²
"to call"	khuh-ʔah	kùh-ve	khúh-lɯ	khɔ-se

前稿において "to call" には，Bisu *khɯ-, Akha khu-, Bur. khɔ- を推定したが，リス語形 khuh-ʔah はアカ語形 khú-ɦɯ と共通する形であり，ビルマ語形 khɔ- に対応する規則形式と考えたい。

Bur. -ɔŋ : Bisu -ɔŋ にアカ語の -on が対応するか -o があたるかによって，筆者は Rule 55 と 56 を区別した。リス語はこれに -y, または -u が対応する。この -y は初頭音 d- につづく環境の一部でおこった変形であろう。この仮定にたてば，リス語では Rule 55, 56 の二つの通則は弁別する必要がなくなる。

Rule 55, 56　Bisu -ɔŋ : Akha -on, -o : Bur. -ɔŋ : Lisu -y, -u

	Lisu	Shi	Na	Bur.
"wing"	dỳ-lǽ	tôh-la	tùh-la	ʔa-tɔŋ
"to sell"	vù-ʔah[13]	hɔ́h-ve	ĥôh-lɯ	rɔŋ²-se
"thousand"	-tu	×	×	-thɔŋ
"hole"	khù	ɔ̂-khɔ̀h	ô-khóh	a-khɔŋ²

"boat" Lisu tsuh lǐh は共通形式 hliy に対応し，ビス語・アカ語の共通形式 lɔŋ² とは異

13) リス語 vù-ʔah "to sell" は，一見 vu-ʔah"to buy" から作られた形式であるような印象をあたえる。(たとえば "difficult" sáh-ʔah: "easy" sah-ʔah などから類推して) しかし，事実はビルマ語形 rɔŋ-se と規則的に対応する形式である。Lisu v- : Bur. r- (Rule 7), Lisu -u : Bur. -ɔŋ (Rule 55, 56)。

語幹語である (p. 44)。そのほか，つぎの対応例がある。

"to trap"	Lisu thuh-ʔah	:	Bur. thɔŋ-se
"to bark"	lúh-ʔah	:	hɔŋ-se

Rule 57 Bisu -ɔ, -ɔk : Akha -o : Bur. -ɔk : Lisu -u, -o

		Lisu	Shi	Na	Bur.
a.	"to wither"	hòh leh-ʔo	gu-ve	ɣu vi-lɯ	khrɔk-se
	"poison"	tóh-ʔah	tò-ve	tò-ma	ʔa-tɔk
	"to be enough"	lǒh-ʔah	pê lù	laě lù	lɔk-se
	"six"	tshò	khɔ́-ma	khó-ma	khrɔk
b.	"skin"	jǐh ku dzɯ	ɔ̂ ɣì kǔ	ô ɣù̀ kǔ	ʔa-khɔk
	"to be dry"	dzuh-ʔah	×	×	khrɔk-se
	"to fear"	dzu-ʔah	kɔ̌-ve	kǒ-a	krɔk-se

Bur. -ɔk にはリス語で -o または -u の2形式が対応するが，後者は k-, dz- につづくときにのみおこっている。-r- を副次音素とする cluster はリス語で，たとえば khr-> dz-, khr->tsh- のように変化したが，-y を副次音素とする cluster は，母音を -u から -y に変えたらしい。"monkey" Lisu my 形式の成立には，miu>my の変化を想定できる。(Lahu mɔ̀, Bur. myɔk) しかし，-u>-y の変化が共通形式の -y- を副次音素とする cluster のはたらきに由来する場合とそうでない場合を十分に弁別できるとは考えていない。

以上に比較した形態素は，すべてビルマ・ロロ語系の代表的な形式をもっていた。しかし，ここに提出した諸通則は，前稿「ビス語の系統(続)」でビス語・アカ語・ビルマ語の間に設定した通則をそのまま延長できたわけではなかった。ある通則はリス語を対象とした場合にまったく意味をもたなかったり，ある二つの通則はリス語では弁別する必要がなかったりした。音素の対応関係のみを問題にするならば，中古ビルマ語 -e, -eŋ, -et, -it, -ɯŋ, -ɯk がリス語でどのような形式に対応するのかは不明であり，リス語の母音の来源もあまり明らかではなかった。一例 "to be near" nɤ̌h-ʔah が Bur. niy-se に対応し，それと並行して "to untie" phɤh -ɣɯh が Bur. phriy-se (Bisu phɯ́-ŋɛ, Akha phɯ́-ɦɯ) にあたるところから，-ɤ 母音は，本来 -ɯ であるべき形の変形とも考えられた。

リス語は，変遷のある段階で，はげしい変化を被った。初頭子音の性格の違いにしたがって，同じ母音が数種類に分裂し，また分裂した単位が融合する現象が広くおこった。この事情は，上述のいくつかの通則をみれば明らかである。いま，かりにリス語形を中心にして，ビルマ語形のどれとどれに対応するかをあげると，その分裂融合の状態をだいたいうかがうことができる。

Lisu		Bur.
-a	:	-a -ak
-ua	:	-a -aŋ
-ia	:	-ya -yak
-e	:	-la -yaŋ (?) -at
-æ	:	-ak
-i	:	-atš -uy -iy -i -ań -ʷat -ap -up -ut -im -ip -ɯ
-ɯ	:	-ʷa<*-ʷo -atš -uy -iy -i -ań -ʷat -up -ut (-um) -ɯ
-u	:	-aŋ -ay -u -ɯ -ɔŋ -ɔk
-o	:	-aŋ -ʷak<*-ʷok -un -ap -am -ɯ -ɔk
-y	:	-ań -u -ɔŋ
-œ	:	-am -um
-ɤ	:	-iy

リス語の母音体系を歴史的にみると，記述的に同一音素とした単位の多くが，数種類もの通則に支配されて分裂融合した結果成立していることが明らかとなる。分裂融合の代表的な例として，歴史的にほぼ同じ過程を進んできた -i 母音と -ɯ 母音をあげることができる。また現代リス語の形式には，たとえば nɯh>nɤh とか tshœh>tshɯh のような個別的な変化がかなりおこったことも十分に想定できた。ここではそれらを変形としてとらえざるを得なかった。

これらの事実は，また一般的な問題，歴史的な観点と記述的な観点の交叉としても，重要な材料を提供するであろう。

ビス語・アカ語・ビルマ語の共通形式に対して，リス語が対応不詳の異源語をあてることも少なくなかった。しかし，この異源語がリス語の本当の性格をさぐる上に重要な役割を果たすのである。

さらに詳細な対応関係を発見する作業とともに，一方で個々の形態素の分布を中心に，それらの異源語の来源の解明につとめなければ，リス語の性格をこれ以上明らかにはできないであろう。

II　リス語とロロ語とチベット語

「ビス語の系統」の中で，筆者が主張したごとく[14]，リス語がたとえアカ語やビルマ語とかけ離れた形式を含んでいるにしても，その特殊な形式が，そのほかの同系統言語のいずれかに対応する可能性は否定することができない。

14) 『東南アジア研究』第4巻第3号(1966)，p. 53.

以下，ビス語およびアカ語に比べて異源語形式と認められるリス語の形態素が，ロロ語に，あるいはチベット語に対応する例を若干取り上げて，同時に形態素の分布を考えてみたい。

1. リス語とロロ語

(1) "head" "fish" "spoon" などに使う classifier にリス語 ma がある。ビス語・アカ語・ビルマ語では，これに対応する形はないが，ロロ語のつぎの形態素がそれにあたる。

Nyilolo mɑ 44, Ahilolo mo 44 "classifier"　Lisu -a: Nyilolo -ɑ: Ahilolo -o も規則対応である。

	Nyi	Ahi	Lisu
"to eat"	dzɑ 11	dzo 21	dzàh-ʔah
"knife"	mi-thɑ 11	tho 21	ʔah-thàh
"child"	zɑ 11	zo 11	zàh
"ear"	nɑ 55 po 44	no 44 po 44	náh-poh

(2) "to be big" を意味するリス語 ʔuh-ʔah は，上述のごとく，ビス・アカ語形（およびラフ語形）とともに共通形式 *ray<*kray に遡れたが (cf. p. 29)，リス語には，そのほかに jǐh dà mah という形がある。この -mah は Bur. -ma³ にもあたるが，上の "classifier" ma と並行して，ロロ語の -mɑ によく対応する。Nyilolo -mɑ 33 Ahilolo -mo 44 "big".

	Lisu	Nyi	Ahi	Akha	Bur.
"to be big"	ʔuh-ah	jæ 11	ɣa 21	jo-hù	(kri²) *ray<kray
"big-"	-ma	-mɑ	-mo	×	-ma -*ma

(3) "back" を意味するリス語 ka-ku は，ビス語 tàŋ khàŋ アカ語 na xòn と対応しないが，一見，ビルマ語形 kyɔ または khyɔk kun² にあたるように思われる。しかし，つぎのロロ語形 Nyilolo kɯ 44 : Ahilolo kɤ 44 とリス語 ka-ku の対応が確実であると，このビルマ語との対応関係は支持できない。なぜなら，Lisu -u : Nyilolo -ɯ : Ahilolo -ɤ (Bur. -ɯ) は，規則対応であって (cf. 上掲 "to steal", "nine", "to cry" etc. p. 35-)，そこで予想できるビルマ語形は *kɯ または *kyɯ であり，kyɔ または khyɔk ではないからである。それゆえ ka-ku はビルマ語形とは異語幹語であり，ロロ語 kɯ に対応する形式であることがわかる。

(4) "to turn" を意味するリス語 tsoh (-je)-ʔah は Bur. hlaň³-se, Bisu ŋɔ̀j (-ʔɛ́)-ŋɛ, Akha dží me-ɦɯ のいずれとも対応しない。しかし，ラフ・シ語 tsɔ̀h-ve, ラフ・ナ語 tsòh (-kae)-lɯ と同源形式であり，ロロ語 Nyilolo tʂo 44, Ahilolo tʂu 44 にも対応する。Lisu -o : Nyi -o : Ahi -u にはほかにも並行例があるから，リス語 tsoh-ʔah の来源形式として，*tsaŋ を設定できる。

	Lisu	Nyi	Ahi	Bur.
"to be light" (not heavy)	lòh-ʔah	lo 33	lu 22	laŋ²-se
"to be deaf"	náh bòh	bo 11	?	na²-paŋ²-se

(5) "bamboo" を意味するリス語 mah-tshòh はビルマ語の wa² とは対応せず，ロロ語の mɑ (Nyilolo mɑ 44, Ahilolo mo 44) に対応する。

"bamboo" には，*va と *ma の2形式があって，つぎのように分布している。

	Bur.	Maru-Lashi	Lahu	Akha	Lisu	Lolo
*va	wa²	wó	vá	zà-bó	×	×
*ma	×	×	×	×	mah-	mɑ

(アカ語の bó は "tree," ビス語はタイ語からの借用語を使う)。

(6) "morning" Lisu ni nǽh は Bur. sɔ, Akha ù-šó, Lahu -sɔ̌ の共通形式 sɔ とは対応せず，Nyilolo ne 22, Ahilolo nie 44 に対応する。Lisu -æ : Nyi -e : Ahi -ie はつぎの例に見られるように規則対応である。

	Lisu	Nyi	Ahi	Bur.
"pig"	ʔah-vǽ	ve 22	vie 44	wak
"hand"	lǽ phǽh	le 22	lie 44	lak
"leaf"	sɯ̌h phǽ	phe 22	phie 44	phak
"to be sharp"	thǽ-ʔah	the 44	thie 44	thak-se

リス語とロロ語が互いに近い形式をもっていても，これは当然である。そして，この両言語の対応関係がリス語の変化をあとづける推論を支持することも当然あり得る。その例をいま一つ出してみよう。リス語 "to speak" khjœh-ʔah は，ビルマ語 tšhɯ-se に対応する。一方 "to say" be-ʔah は，ビルマ語 pwak-se "to utter" にあたるように思われるけれども，Lisu -e : Bur. -wak は対応通則ではない。ところが，この be-ʔah はロロ語 Nyi be 44 Ahi bie 44 に対応する。Lisu -e : Lolo -e は，このほかに1例 "to be black" Lisu jih ne-ʔah : Nyi ne 44 : Ahi nie 44 : Bur. nak-se がある。リス語 ne-ʔah は，さきに næ-ʔah の変形であると推測したが，この推測は，上述の規則対応 Lisu -æ: Nyi -e : Ahi -ie : Bur. -ak から支持できる。それと並行して，be-ʔah も *bæ-ʔah の変形であり，Bur. pwak-se に対応する形式であることをロロ語は論証する。

なお，"to say" "to speak" の2形式の分布はつぎのようになっている。

	Lisu	Lolo	Bur.	Akha	Bisu
*to say"	be-ʔah<*bæ	be 44	pwak-se	(ŋè-ɦɯ)	×

"to speak"	khjœh-ʔah	×	tšhɯ-se	×	kjì-ŋɛ
"to tell"	×	×	prɔ²-se	×	×

以上に示した形態素分布のリス語とロロ語の間に見られる等象性は，両言語の音素形式の対応関係をも証明することになる。これには，対応通則の設定のほかに，たとえば "waist" Lisu dzòh-lɤh が Old Bur. krɔ よりも Nyilolo dʐu 22 : Ahilolo dʐu 44 により似ているといった対応形の近似性も問題になる。たしかにリス語は有声初頭音をもっているなどの点でロロ語に近いけれども，その近似性を否定する事実がないわけでもない。それはリス語 m- の一部にロロ語 n- が対応する事実である。[15]

	"many"	"monkey"	"fur"	"eye"	"hungry"
Nyi	nɑ 55	nu 55	nu 44	ne 44 sʐ 11	ṇ 22
Ahi	no 11	nu 55	nɤ 44	nie 44 sa 21	ni 44
Lisu	ʔah-miah	mỳ	mɯ̀h	miah sɯ̀h	mɯ̀-ʔah
Bur.	a-mya²	myɔk	muy²	myak tši	mwat-se

この点でリス語をとらえてみるならば，すべて m- で対応するアカ語，ラフ語，ビルマ語に，リス語は，やはりより近いことになる。

中国雲南省からビルマの北方にかけて分布するマル語，ラシ語の中にも，リス語のいわゆる異源語に対応する形式がある。たとえば "to bear a child" Lisu jíh-zàh xuh-ʔah は Lahu Shi pòh-ve, Lahu Na pòh-lɯ, Akha bò-ɦɯ, Bur. phwa²-se の共通形式 *bʷo- とは対応せず，Maru kháo, Lashi khù の共通形 *khu- にあたる。

"path" Lisu dzah-guh のはじめの形態素は，Bur. lam² とは関係なく，Maru khjó Lashi khjó の共通形 *khjá <*khrá に対応する。Akha gá-ma, Bisu kéŋ-ba もこの共通形式と同源であろう。

ビルマ・ロロ語系のいくつもの支系を交叉して，同源形式を含んでいるリス語は，本当の意味での link language の役割を果たしていると言える。このリス語の性格が極端にあらわれるのが，その異源語がチベット語に対応する場合である。

15) my->ɲ- の変化は，チベット語にもおこっている。

	Wr. Tibetan	Lhasa	Sigatse	Chamdo
"insane"	smyon-pa	ɲøn¹-pa¹	ɲøn¹-pa¹	ɲøn¹-pa¹
"to experience"	myong	ɲuŋ³	ɲoŋ³	ɲoŋ³

金鵬『蔵語拉薩口喀則昌都話的比較研究』(北京：科学出版社，1958) による。なお聞宥「論漢蔵語族中 m>ɲ 之演化」は広範囲にこの現象をとり上げている。『金陵，斉魯，華西三大学中国文化研究彙刊』1巻(1941)。

2.　リス語とチベット語

(1) “boat” を意味するチベット・ビルマ共通形式として，*lɔŋ, *gru, *hliy の3形式を設定できる。この3形式の分布は，つぎのようになっている。

	Bur.	Maru	Lashi	Akha	Bisu	Lahu	Lisu	Lolo	Tib.
*lɔŋ	lɔŋ²	×	×	lò	lóŋ	hɔh	×	×	×
*gru	×	×	×	×	×	×	tsuh-	×	gru
*hliy	hliy	lâ	lêi	×	×	×	-lǐh	ɬʐ 44	×

リス語 tsuh-lǐh は，チベット語形 gru とビルマ語形 hliy の結合から出来ており，ビルマ・ロロ語系の中で，リス語のみがチベット語との共通形式を保存していることになる。

(2) “to be hot” を意味するチベット・ビルマ語形には，*hlɔŋ と *tsha と *pu の3形式を設定でき，その分布はつぎのようである。

	Bur.	Maru	Lashi	Akha	Bisu	Lahu	Lisu	Tib.
*pu	pu-se	×	×	×	×	×	×	×
*hlɔŋ	×	làuŋ	lòuŋ	×	hlóŋ	hɔ̀h-ve	×	×
*tsha	×	×	×	jo-tsha-tsha	×	×	tshah-ʔah	tsha-po

この例ではアカ語とリス語のみがチベット語 tsha-po に対応する形式を保存している。

(3) “star” を意味するビルマ・ロロ共通形は *gray である。

	Bur.	Maru	Lashi	Akha	Bisu	Lahu Shi	Lahu Na
*gray	kray	kyì	kyì	ʔa-gú	ʔù-kù	mɤ̌h-kìh	múh-kúh

チベット語には，skar-ma “star” と gzaḫ “planet” があり，この skar-ma が上述の gray と同源形式であると考えられる。リス語 ku-zà は，ビルマ語形とチベット語形の結合から出来ていて，ku- は *gray に，zà は gzaḫ に対応する。

この単語構成法は Nyilolo 語形 tɕæ 33 zɑ 11 (Ahilolo tʂa 44 zo 21) とも一致していて，Nyilolo の tɕæ 33 が *gray, Lisu ku- に対応し，zɑ 11 が *gzah, Lisu zà に対応する。

(4) “to arrive” リス語 péh(-jé)-ʔah は，チベット語 pheb-pa に対応する。これと同源形式はアカ語にもビス語にもラフ語にもそのほかの言葉にも見出し得ない。

(5) “to be cold” リス語 gja-ʔah は，チベット語形 ḫkhyags-pa にもっとも近い。しかし，それと同源形式は，ほかの言葉にも保存されていて，Akha 語の jo-ga ga, Lahu Shi kǎ-ve Lahu Na kǎ-a Maru kjɔ̌-ra がそれに対応する。ビルマ語形 khyam²-se “to be cold” は同源異語幹の形式である。

(6) "to wear" Lisu gùh-ʔah は Tib. bgo-ba にもっとも近い。ビルマ・ロロ共通形式として，"to wear" には *wat- と *dum- の2形式を設定できる。Maru, Lashi, Bur. は wat- に，Akha, Bisu, Lahu は dum- に対応する。リス語は"服を着る"ときには gùh-ʔah を使うが，"鞋(わらじ)をはく"ときは "to put on the sandals" tshɯh/ňi dœ̀h-ʔah という。この dœ̀h-ʔah は Akha, Bisu, Lahu の dum- に対応する規則形式である。リス語は対象によって "to put on" を分割して，"服"には，チベット語と同源の gùh-ʔah を使い，"鞋"に限って，ロロ語系の dum を保存したことになる。

"to wear"	Bur.	Maru	Lashi	Akha	Bisu	Lahu	Lisu	Tib.
*wat-	wat-se	vè	wòe	×	×	×	×	×
*dum-	×	×	×	dḿ	túm-ŋɛ	dɛ̀h-ve	dœ̀h-ʔah	×
*go-	×	×	×	×	×	×	gùh-ʔah	bgo-ba

(7) "to be easy" Lisu sah-ʔah は，マル語，ラシ語，ビルマ語，ロロ語の lway-se には対応せずに，チベット語 sla-ba に対応する。Lahu ŋae-va はビス語形と同じく，タイ語 ŋaai からの借用語である。

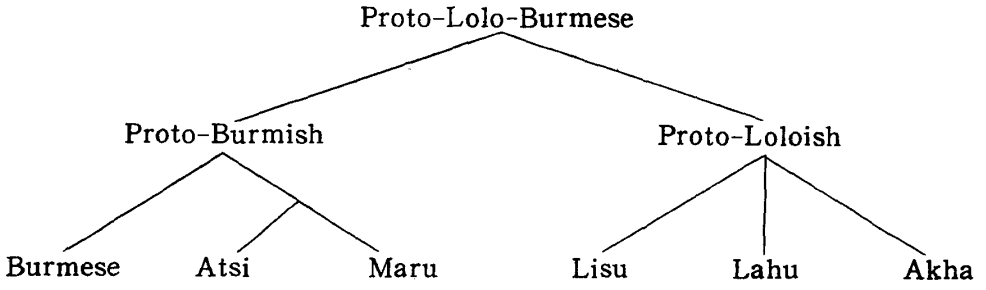
そのほか，つぎのような例もリス語とチベット語が同源形式である可能性を示している。

		Lisu		Tibetan
(8)	"to look"	tœ̌h-ni		lta-ba
(9)	"to blow"	gjɤ-ʔah		phu rgyab-pa
(10)	"tongue"	lah tšhœ	:	ljags<la jags(?)
(11)	"to hold"	tǎh-ʔah	:	sten-pa
(12)	"stout"	pháh-ʔah	:	sbom-pa
(13)	"wet"	phàh-ʔah	:	sboŋ-ba "to steep, soak"
(14)	"night"	muh khuǎ	:	dgoŋs-mo
(15)	"sickle"	múh tshɔ̌h	:	zor-ba
(16)	"friend"	guah tshòh	:	grogs

以上に述べたリス語の異源語とロロ語およびチベット語との比較研究は，今後なおいっそう押し進めることが可能である。とくに前者の研究は，リス語とロロ語の同源形式全体を対象とする一般対応通則の発見として進展させなければならない。もちろんその段階では，Bisu, Akha, Lahu, Bur. とも同源である形式を包含することになり，いっそう広範囲に同源語の分布を追求する作業が要求されるのであろう。

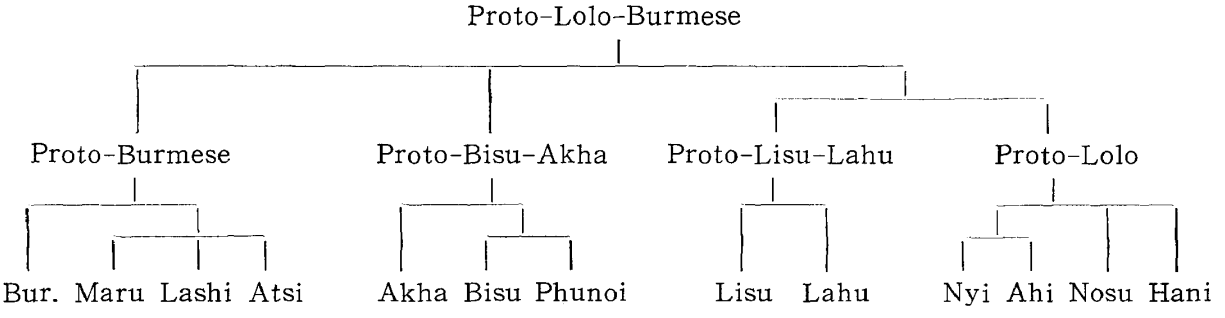
む　す　び

1967年にアメリカの人類学者 Robbins Burling は *Proto Lolo-Burmese* と題する書物を出版した。[16] Burling は，その書物の中で，Burmese, Maru, Atsi, Lisu, Lahu, Akha 語の比較研究を試みている。その内容について，詳しい批判はここでは避けたいが，多くの賛同できない証明が含まれている。[17] ここで問題としたいのは，Burling が上記6種の言語を，Proto Lolo-Burmese の構成員として，つぎのように位置づけた点にある。



私は，Bur., Atsi, Maru の位置については，Lashi 語が扱われていない点を除けば，とくに異論はないが，Lisu, Lahu, Akha 語はこのように簡単には配置できないと思う。

Akha 語はさきに述べたごとく，Bisu, Pyen, Phunoi 語と一群をなし，Lahu 語は Lahu Shi, Lahu Na, Lahu Ni などと独自の一群を構成している。Lisu 語（諸方言を含む）も，本稿で考察したごとく，Burling がここで全く無視している Lolo proper にもかなり近いグループである。私はこのような系統樹表を作るのならば，今の段階では，つぎのようにするのが，より適切であろうと考えている。



問題は Lisu, Lahu, Akha 語を本来の意味での Loloish のグループに属させ得るかどうかにある。この問題は早急には解決できないが，Akha 語は声調の性格からみて明らかにビルマ語系に属するから，Bisu 語などとともにビルマ語系により近い中間グループとして扱い，一方

16) *International Journal of American Linguistics*, Vol. 33, No. 1, part II (1967), 101 pp.
17) この書物に対する批判は Matisoff の Lahu and Proto Lolo-Burmese (Pre-Publication copy) において取り上げられている。なお6巻4号掲載予定の拙稿を見られたい。cf.〔補註〕

Lahu 語と Lisu 語は，Lolo 語系により近いグループとして考える。つまり Proto Lolo-Burmese は四つの大きいグループから出来ているとしたい。しかし，正直にいって，私はいまのところ，この結論があたっているかどうかは自信がもてない。この問題はなお syntax の比較研究などを経て，さらに検討しなければならないであろう。

体系だった Proto Lolo-Burmese 形式の設定は，まだ時期尚早であると思う。実際の意味での Proto Lolo は未だ出来ていないし，またここで考えている Lolo 語は Burling が扱っている Lahu 語や Lisu 語に包括されるような性格の言葉ではない。

私は，このグループの中でもっとも形態素形式を豊富にもつビルマ語を中心として，

(1) Burmese—Maru—Lashi—Atsi, (2) Burmese—Akha—Bisu—Phunoi, (3) Burmese—Lahu 諸語 (2.4 とも関連しながら), (4) Burmese—Lisu (2,3 とも関連しながら), (5) Burmese—Lolo 諸語の各 subgroup の比較研究をステップごとに追っていくのが先決の重要な仕事であると考えている。拙稿「ビス語の系統」および「ビス語の系統(続)」は，このうち第 2 の段階を取り上げたものであり，本稿も，前稿「リス語比較研究 I」とともに，上記第 4 の段階を扱ったものである。つぎの機会に第 3 の段階の比較研究を目的とする「ラフ語比較文法」を提出したい。

〔補　注〕

Burling は *Proto-Lolo-Burmese* の中で，Lisu 語の音素体系をつぎのようにまとめている。(pp. 22-25) 子音 39 (うち単純子音 27，子音結合 12)

ph	phy	th		tsh	ch	kh	khw			
p	py	t	ty	ts	c	k	kw			
b	by	d		dz	j	g	gw			
m	my	n	ny				ŋw			
f				s	š			x	h	hy
w		l	ly	ř	y			ɣ		

母　音　10

	前舌		後舌	
	張唇	円唇	張唇	円唇
高	i	ɨ	ə	u
中	e	ø	ʌ	o
低	æ		a	

声　調　6

á	高平調
ǎ	中平調少し上昇する
â	少し上昇，終りが降る (緊喉母音)
ā	中平調
à	低平調
aʔ	閉鎖音で終る音節

この体系は筆者の体系とも，既発表のそのほかのリス語の記述 (「リス語の研究」pp. 50-51) とも異なっている。その異動については別の機会に論じたい。